

## 環境文明社会づくり あれこれ(24)

### 源流(24)

OECDのジャパン・レビューとその中から出てきた「アメニティ問題」への論考が長くなり、環境文明社会に辿りつくのが遅くなるのが気がかりだが、現在の私の価値観にもつながっているの、もう一つだけ紹介したい。

それは1980年1月号の『土木学会誌』に「豊かな都市環境を求めて—都市アメニティ考」と題して寄稿したもの(当時私は学会員)。43年も前の論考だが、執筆の動機は、東京はもとより帰国後に訪れた日本の主要都市の環境の貧弱さに衝撃を受け、さらにOECDから指摘された諸課題に対する考察と提言を述べてみたいとの思いから、かなり長文の論文を寄稿した。限られた紙面ではどうてい全体像は示し得ないので、いくつかのポイントのみ紹介するに留めたい。

それは、当時の日本の都市が、長い歴史や文化的伝統を保持する証である風格、落ち着き、うるおいといったものを欠き、経済的欲望やエゴがむき出しの都市の姿であるとの印象を率直に語って、次のように続けている。

「しかもこの印象は、過去数世紀にわたって世界の富と権力を手中に収め、長い歴史を誇るヨーロッパ諸都市との比較においてのみ得たものではなかった。帰国してから早い時期に訪れた、四国讃岐の琴平山(金毘羅宮)の雄大で美しい境内を見た時、あるいは洗練された栗林公園を散策した時、さらにその後、鎌倉の古寺や身延山久遠寺の堂塔伽藍を見た時にも、帰国時に抱いた先ほどの印象を再確認するとともに、昔の日本人—昔といえば国の経済も個人の資力も今日とは比較にならぬほど小さかったであろうに—その人たちが築いたものの品位や美しさや雄大さと、現在の多くの都市にみられる猥雑さや安普請ぶりが鋭く対比されて、悲しみに似た気持ちを味わったことを思い出す。」

このあと論文では、OECDからの指摘、東京に駐在していたEC(現EU)官僚による日本の住宅事情についての「ウサギ小屋」論、ル・モンド紙記者ロベール・ギラン氏の日本都市批判、また政府の『環境白書』が初めて取り上げたアメニティ問題への行政からの対応分野案などを紹介しながら、私は次のように締

加藤 三郎

めくくっている。

「日本の都市の多くは戦後三十年の間に今見る姿になった。これをもっと美しく、ゆとりもあり、しかも、日本では避けることのできない災害にも耐える都市に改造する意志さえあれば、あと三十年もすればすばらしい魅力も風格もある都市をもつことができるであろう。」

幸い、ここに記したとおり、日本の多くの都市の姿は、当時から大きく改善し、加えて伝統文化を今なお色濃く留める田園集落を含め、多くの外国人観光客にも愛され、評価されるようになったことは嬉しい限りである。

93年に退官後、藤村コノエさんや荒田鉄二さんらと直ちに立ち上げた現在の環境文明21では、発足当初から、鎖国政策により否応なしに有限な環境で平和で持続的に生きて江戸時代の人々が培った知恵を探した。それが今、私達が提唱している倫理(心構え)の基盤となっている。このように古きを訪ねる心の姿勢は、私には昔からあったと再確認している。

